

《 翻 訳 》

ウォルフガング・フィケンチャー「法の方法」(一)

米 山 隆 訳

本稿は WOLFGANG FIKENTSCHER, Methoden des Rechts in vergleichender Darstellung Band III, Mitteleuropäischer Rechtskreis 1976, J. C. B. Mohr (PAUL SIEBECK) Tübingen の著者と出版者の承諾に基づく翻訳である。

第二十八章 HEGEL と MARK 以後の法の方法

—— マルクス的な法域 ——

一、従来との関係。「精神の現象学」

経験的な伝統の道程は上述の第二章において個々の追求された。今日の法の方法学の立場において、すくなくとも中央ヨーロッパにおいて経験的な経験知はなくてはすまされないものである。この経験知は、しかしながら、たとえ多様な回り道を経るとしても、法における評価の問いかけに至ったのであり、この問いかけは、あるときは経験的方法と意識的に対立し、あるときはそれを補充して、評価法学を法の経験的方法と並んで歩ませた。樂觀的な、あるいは悲觀的な序列化もなく、普遍的な進歩の進行を自分のものとすることがなく、したがって法を絶えざる発表のなかに見ることがないとしても、国内的な枠と國際的な枠における法の今日の方法学のなかでの経験知と評価との間の健全な緊張はある種の花盛りに、すくなくとも、しかし、高い意識の程度の方法論に導いたということは否定されることはできないであろう。

この——從來から比較的に首尾一貫して経過した——発展と HEGL 主義と MARX 主義の現象を比較することはそれだけいっそう固有名仕方で交錯する。このことは HEGL と MARX の普遍的な哲学的な影響にとつて通用するのであり、同様に、ここで主として関心のあるところであるが、法の方法学への彼等の影響にも通用するのである。それは、あたかも人間主義から流行の法律学と自然法にむかつて画一的に過ぎてゆく発展の上へ、KANT, SAVIGNY, IHERING 及び今日までの現代精神の上へヴェールがおかれているようであり、このヴェールの狭い編目は、高い精神的な投入をもつて織りなされているのであり、確立された、あるいは、実行、理解されうる信じられたものとしての從來からの輪郭をものはやはりと認識させねいのである。

S. 456

HEGL と MARX の今日の法方法学への影響を少数の命題にまとめようとするならば、この命題はこれから発展した概念の装置を使用するのであるが、HEGL によつて負担を課せられた特殊な——両面価値的な実証主義への姿勢は、また、さらにあとまで残りながら、MARX を越えて、短絡的な、適当な経験に至つたのであり、この経験は批判的な評価から免れているのであるが、しかし、それに代わつて意思主義的な評価をより多く開くということが言われることができる。道具類は本質的に HEGL から由来している。彼の影響は法実証主義を広い戦線の上で呼び起こした。(1) MARX はこの方法的な基礎にもとづいて彼によつて教示された、すべての評価の基礎になつている使用価値と交換価値の相異、それ自体の側で本質的に古い起源を持つている概念に関する信仰を通して、実証主義のために評価の機械論をとりつけたのであり、この機械論はそれに合せて作られた政治的な支配構造を規定するのであり、また、そのことを通して全世界を唯一の観点から透視しうる、価値評価しうる、また、統治しうるものとするのである。この支配構造の本質は(正当な意識に学問的に手の届きうる)使用価値を通しての(観察されうる)交換価値に関する批判を貫徹すること、またそれとともに最終的にすべての生活の問いかけにおいて高い手の意味評価を人格的な価値判断の代りに設けることのなかに存立する。そこから、マルクス主義には経済的にいかなる需要の自由も、また、政治的にいかなる言論の自由も存立することができないということが結果としてでてくる。方法的に、したがつて、法に対する HEGL と MARX の影響は問題を閉鎖した、無批判的な、また、内容的に規定しうる思考を意味している。それはこのすべてを包括することにおいて宗教改革以来の市民化された世界にとつてもはやゆきわたつていゝものではなかつた。

HEGL の法の現代哲学と方法学への MARX 外的影響は、たとえ新ヘーゲル主義と LARENZ が最も新しい時代において HEGL

S. 457

の具体的—普遍的概念を法方法学に役立たせることを試みたとしても、比較的狭い限界において保たれていた。HEGELのMARXを越えての影響がそれだけ大きいのは所謂社会主義的諸国においてのみならず、示されうるであろうように、基本権の民主主義の領域においてもそうである。

ヘーゲル主義とマルクス主義の世界とともに精神的に新しい土壌に足を踏み入れられる。従来からの学問史的な叙述を特筆してゆくこと、比較衡量してゆくこと、批判的なこと、分離してゆくこと、また、思慮深いことは奇妙な精神性、文句の多い言語、事物をしばしばむしろ明らかにするよりもヴェールをかける言語は、その側で高い見張所から命令してゆく思考の表現である。超理性的な神的啓示の要素は誤認されえないものである。いっしょに歩まない者は正しくないものである。ヘーゲル主義とマルクス主義は思考的な驚くべき作用効果とともに働いている。すなわち、驚くことは民族、国家と法、商品と労働などのように、しばしば同列に考えることである。このことは二つの他の「架橋」と関連しているのであり、すなわち、それはヘーゲル主義とマルクス主義にとって特筆すべきことであり、客観—主義—統合であり、また、存在と当為の双務的な織りこみである。すべてのこれらの現象に際し類型的な宗教的、神秘的な思考過程が問題であり、このことはその側で理性にふさわしい—終末論にみちびくのである、別言すれば「非歴史的な歴史」、すなわち、より高いもの、完全なもの、窮極的な状態にむかって働いてゆくのである。

それゆえ特筆すべきはまた、政治的な力に対する特別な関係を通してのヘーゲル主義とマルクス主義である。政治的な力は正しい意識を持つ人に帰属する。哲学を理解する人は、悪においても、また、他人が——自分勝手に思いこんでいる——利益のためにも、他人を判断する権利を与えられる。そのような思考の仕方にうちかつことはあきらかであり、その政治的な危険性と同様である。

その際 HEGEL の哲学は根底において大陸におけるアリストテレス的—スコラ的—一元論的な伝承の KANT 後の表現であるにすぎない。KANT を通しての存在と当為の引き離しは、至上命令の良心の呼びだしのなかに受けとめられるけれども、長い間大陸の伝統の一元論的な救済の確実性の要求のためには堪えられないものであった。一八〇七年の「精神の現象学」のための序論（それは本来一種のまとめである）⁽³⁾ HEGEL の精神性の中心的な労作のための序論は反対話的方法のそれ自体において完結した学問的綱領である。疑問は通用しないし、探求されるべき対象の心に浸透してゆく発展がすべてである。対話は探求せらるべき対象のな

かへ押し込められるのであり、また、それとともに対象の「弁証法」になる。心をぐらつせる孤独のなかで HEGEL はみずからと語り、彼が錯誤のように避けている対話を目的々に、また、政治的であるがゆえに、概念の弁証法的な展開のなかへ置いている。弛緩した。万華鏡のように千変万化して振動している一元論は、すばらしく、また、平凡に同時に発生してゆく。HEGEL は理路一貫した、もはや問いかけてゆくこともない自己創造された精神性の、自我と精神の自己設定の思想家である。

MAXX は「HEGEL を足の上へ」立て、いいかえれば、物質を精神のために座らせた。すべてのことは、たとえここかしこで通俗的に承認されているとしても、別異のままにとどまっていた。例外のように独裁を受け入れるために、独裁の頭が全く上から切りとられることができるように——命令してゆく頭の例外をもつて——MAXX は HEGEL の精神的な一元論を彼の弁証法的な唯物論へと機能を変化させた。それゆえに HEGEL もまたマルキシズムにおけるようにどこでも効力をあらわすようにならなかった。民主主義は問いかけと疑問をもはや無くてすまそうとは欲しなかった。西欧の基本権民主主義において HEGEL は、せいぜい、スピノザ主義の後期カントの執行者として、たいていの場合、しかも、各々の独裁が承認されることができる思考の怪物としてのみ通用している。ドイツにおいてしかし、HEGEL の哲学は事物適合的であつたし、ここで一九世紀初頭に反対対話の、また、基礎をたずねる「精神」の權威のある執行可能性の世俗的な哲学が政治的に必要とされた。今日もまた、なお、多くの人が精神にはそれがびつたりであると思つている。次にはこの精神の姿勢の法方法学の側面が検討されなければならない。

一、HEGEL の法概念とその方法学的な観点

(一) HEGEL の哲学的な出発の地位

(a) 時代の題目と HEGEL のこの題目の解決

宗教改革時代の政治的な平信徒司祭職は対話の、また、議論された疑問の学問的な表現形式のなかにその表現を発見したのであり、また、新しい歴史的な理解と発展の理解に到達したのであつたが、ドイツにおいて決して正しく発展に至つたのではなかった。政治的に活動することが欠如しているなかで人々は自然法的な問題を深めたし、また、その際進歩してゆく俗化をともなつて自然

S.459

からの當為命題の益々糸のすりきれて糸目のみえる演繹に到達した。このことは、KANTが、存在からいかなる當為、哲学的要請も演繹されないということ(理念は DAVID HUME からつづいて)を注意するまでつづいたのであり、この要請は進歩していった俗化に面して自然の世界の觀察されるべき対象から個人主義化され、また、非政治化された Moral 道德のきびしい分離に立ち至った。道德的な点において周囲に対し個人を解放することは KANT の著作では認識論的な点において主観、客觀及び理性の三つ組の者を条件づけた。主観には理性の力により客觀をつかむことが開かれたし、賢明にして、また、そなへのある人間は、それゆえ、今でも、また、ここでも遠景でなく、また一時的でなく認識することができたので、宗教改革後の歴史理解は、それは認識理論的に分離・隔絶してゆくものであり、遠景のものであり、それゆえ、発展の歴史であったので、傍らに押しやられたままであつたにちがいない。

その間に大きい西欧の革命は、ドイツを誤解によつて苦しめたフランス革命を通して媒介して、人間主義と宗教改革の政治的な思想財産を全世界に広めたし、また、それを免れることのできない前提とした。ドイツの哲学にとつて問題は、歴史理解を自分のものであるとして自由にするということのなかにあつたのであり、この理解は、とりわけイギリスから來ているのであり、議論を回避されえないものとしたが、非政治的また非歴史的な KANT の三つ組には適さなかつた。時代における理性は KANT にとつて解決されえない題目であつた。

HEGEL の綱領と哲学的な功績は、新しい歴史理解を古い理性の範疇との一致にもたらず試みを敢えて行うことであつた。歴史を理性にままとめるこのことが彼の主たる願望であつた。そこから演繹された側面の問題は「直観」をままとめることのそれであつた。疾風怒濤は、本質的に SHAKESPEARE すなわち、宗教改革後の——政治的な人間像によつて活潑に動かされたのであり、KANT 的な認識に直接的な直観を対立させた。このことは大部分カント哲学の——意図されたものでない——産物であつたし、その理由は、道德的に拘束をとかれた個人は KANT の路で認識批判的に思考するのみならず、いわば世界を新しい目をもつて直接的に見ることに移行したのはもちろんであつた。HEGEL にとつて、このことは、歴史と理性の形而上学的なまともに認識してゆく主体と認識される客体の認識論的なまともをつけ加える機縁であつた。彼はその際 SPINOZA、それとともに中世のユダヤ的な神秘的なカバラを支えとすることができた。

S.460

この基礎にもとづいて HEDEL には、人間にとって認識可能なものの完全に思想上の新しい意味づけを企てることが可能であった。精神の現象学に関する論理学の力強い路上で法哲学的、宗教哲学的また歴史哲学的な題目に突き進んで、HEDEL は、殆ど学問のあらゆる領域、法をもまた踏破したし、また、詳細な分析において彼の形而上学的な基本構想と彼の認識論的な基本構想を大多数の現象に適用した。とはいえ、成果は到るところで西欧的—革命的な、発展において考えてゆく歴史理解をはねつけることであったにちがひなかった。歴史と理性をまとめる大きな試みは、概念に内在する弁証法を通しての概念を超越してゆく対話の代用のために、非歴史的な、もはや疑うことのない、孤高の理性に導いた。KANT の「手本」と「目的」は、KANT がそれらを焼きつくしたところで、哲学することの戸口のの前にとどまったままであった。この点において KANT と HEDEL は同じである。「現象学」の序文は特に目的に敵対的である。しかし、KANT が道徳的な個人をきずなから自由にする代りに考えてゆく人間のとらわれていることが HEDEL の三歩のなかに、すなわち精神の神秘的な終末論のなかに登場した。

S.460

(b) 「歴史哲学」

「精神現象学」(一八〇七年)と並んで最も開示に富み、HEDEL の思考をぎっしりと押しこんで述べている論文の一つとして「歴史哲学」があげられるのであり、これは以下においてひとしく HEDEL の根本的立場をあきらかにするために引用される。形而上学的な主たる願望、理性と歴史をまとめること、また、それとともに歴史、国家と法を意味づけることと同様に HEDEL の認識論的な論理操作はこの論文によって要約してしめされるのであり、その際対象である歴史、国家そして法に関する「精神現象学」における草案を実行することが問題である。⁽⁶⁾

HEDEL の題目は、彼が「歴史哲学」と名づけているところのものである。歴史哲学は HEDEL によってはじめに歴史の思想上の説明として一般的に書き換えられる。一方では事実上の出来事の現実と他方では哲学の思想の世界との間でそれでもって切りきかれた間隙は、HEDEL にとって、その場合「昂揚させてゆく契機」を形成し、そこから総合が求められる。考える可能性の広い分野の上で哲学から歴史を考察する際歴史にもちこまれるのは、ほかならぬ理性のみである。HEDEL が理性と名づけるもの、また、彼がこの代りにこれ以上研究しようと思わないもの、これらのことの短い展開のあとに次の前提がつづくのである。すなわち、彼

S. 462

神以外のところで容易に理解されえない理性と精神との関係が生ずる。理性は、神的な摂理として HEGEL の確信によれば、いわば、現象の全体を統括する。現象自体が精神的なものと物質的なものと分れる。理性は歴史を形成し、歴史における物質的現象は無視されえないことはもちろんであるが、法定的な重要さは宇宙史が精神の領域に帰属することの上にある。

精神と物質との間の限界づけは、次の節のもとに款において驚くべき仕方であてられる。HEGEL は次のように思っている、すなわち、物質は重力のもとにあり、したがって自己の外にある点に傾く。物質は、したがって、いわば、すべての側面から思考され

S. 461

は理性の哲学的領域を既に完全に歩み通したので、世界歴史は合理的な事象の発展であるということがこの歴史から演繹されることとができるということを HEGEL は哲学に馴れない聞き手のために言うことができるのである。問いかけられている歴史概念は世界精神の、絶えず同一のままにとどまる精神の、しかし、その本質を世界において、また、世界の現象において展開する精神の必然的、合理的な道程を述べるのである。これが歴史の成果であると。同時に成果である前提のこの知らせのあと、彼は熟考の歴史的—経験的な進行を要請している。

ANAXAGORAS の召喚のもとに、理性は世界を駆使してゆく力である。すなわち、この理性の思考は世界をあやつるということは意味あきらかである。この際理性は、また、神的な仕方では世界を導く摂理として考えうるであろう。歴史の進行、人間の情熱、人間の創造的精神、世界の大きな舞台で展開する現存する力は全体的にこの摂理の計画を述べるのである。

第二節において、理性の本質的な決定の問いかけは、この理性が世界との関係において考察されるかぎり、世界自体の最終決定への問いかけと同一であるということが導入的に述べられる。実現することが世界の目的である。考察されるべき現象、すなわち、宇宙史は精神の国のものでなければならぬ。世界という表現は二つのもの、自然的な性質と霊的な性質を包みこんでいる。自然的な性質はまたその役割を世界史において演ずるのであり、また、このことに関する自然の關係が注目されなければならない。自然の。考察の本来の対象は、しかし、精神である。宇宙史の現象を解釈するために、自然は理性的な体系であるけれども、これをこのような体系として考察することは必要でないであろうし、精神との関係において、歴史の内部においてもまた、自然の關係を考察すれば充分であろう。そこでは、歴史、すなわち、宇宙史はきわめて具体的な現実に展開するのである。

次に、何がここで精神のもとで理解されるべきであるか、すなわち物質に対する反対の物が詳しく規定される。そこからまた精神以外のところで容易に理解されえない理性と精神との関係が生ずる。理性は、神的な摂理として HEGEL の確信によれば、いわば、現象の全体を統括する。現象自体が精神的なものと物質的なものと分れる。理性は歴史を形成し、歴史における物質的現象は無視されえないことはもちろんであるが、法定的な重要さは宇宙史が精神の領域に帰属することの上にある。

た重心に向って動き、ここで一つにまとまろうと欲する。精神、すなわち、物質の反対物は事情が逆である。精神はその本質を自身自身のうちにない、「自己自身とともに」あり、また、そこからすべての方向にむかつて展開する。精神の本質は、それゆえ、自由である。HEGELは、彼にとって物理学的な運動可能性の意義における自由が問題であるのみならず、人間的な意義における、また、政治的な意義における自由が問題であるということをあきらかにする。

第二の節のもとにある款において、いかなる手段を精神は、したがって自由もまた世界における実現の際利用するかということがとり扱われる。こうでHEGELは歴史の概念を導入する。自由というものは、まずはじめに発展させられていない概念をいいあらわす一方において、自由の手段は外面的であり、また、現象に附着させられているのであるが、歴史における自由は知覚してゆく考えこむことを呈示する。歴史において、したがって自由が、精神が展開する。ここに重要な個所がつづくのであり、そこからいかに意義をこめて——自然にHEGELは彼の精神、彼の自由を理解しているかがあきらかになる。彼は、すなわち、歴史は既に一番最初に眺める際、人間の行為はその必要から、その情熱から、その性質と資質からでてくるとことを示しているということを述べている。哲学してゆく観察者はHEGEL以後行為の唯一の原動力、歴史の舞台での唯一の影響力であるのは、ほかならぬこれらの必要、情熱と関心であるという直接的な印象のもとに立っている。精神とその最も自然の形態における見つけられた歴史的な行為を同一視することは批判的な点であり、この点はHEGELの法理解にとって、のちにはMARXの法理解にとって決定的となる。ここで経験が精神のために説明され、また、これから示されるように、それとともに経験自体の尺度のために説明される。KANTのやり方で「現象論」の序文の第三款の最後に批判して非難された目的は歴史をつくりゆく「必要、情熱そして関心」として「精神」となり、この精神は同時に歴史の自由と目的であるであろう。

S.463
自から実現してゆく精神としての歴史に対する摂理の役割は距離をおかれたものと詳しく書かれており、このようなものとして、どんな場合でも、考察してゆく人間に歴史の道徳的な批判を許容しないのである。HEGELは、彼がもういちど強調するように、現象を把握することのまわりをめぐるものである。彼はまた歴史における負い目と苦悩をこれらの現象のなかに数えている。HEGELがそのこと自体を冒頭の款で行ったように、摂理という文言の位置に再び理性という表現がおかれるならば、HEGELによれば歴史の歩みは理性によって抵触されることなく展開する。理性の、摂理の計画の指導してゆく機能につきここでさらなる意味表

明はなされない。必要、情熱と関心は、むしろ、「精神」をうみだすのであり、この精神は歴史の目的をさしこんでいる。

歴史における動かしてゆく力として、したがって、「理性」の代りに情熱が述べられる。世界におけるすべての偉大なことは情熱から生まれたといわれる。定立としての理念、精神の一部、反定立としての人間の情熱は宇宙史の歩みを生ずるのであり、その理念と情熱は、国家における倫理性の条件のもとで、一方では精神でもある国家において自由のために結びつくのである。

それとともに Hegel は彼の論文の第二篇の第三の節へと移ってゆくのであり、この節において彼は、精神の完全な具体化は国家以外のいかなるものでもないということを叙述している。国家はまた倫理的な全体でもある。倫理的な全体において、国家において、個人が自由であり、また、その自由をたのしむことができる現実の形態が到達される。法、倫理と国家は自由の積極的な現実性である。社会と国家は条件であり、そのもとに自由は存立しているというのである。

叙述の第二篇はまとめてゆく命題をもって終わるのであり、この命題にしたがって、精神のもとに何が理解されるか、いかなる手段を精神はその実現の際利用するか(すなわち、みずから自由に展開してゆく必要)またいかなる形式を精神はその現象的な実存において、その完全な実現の際承認するか、すなわち国家の実存を承認するかが、今や告げられる。今や、と Hegel は意見を述べる、この導入してゆく思考のために世界歴史の歩みの考察がただわずかに残っている、と。何故、歴史の歩みがグノーシス派の神秘的直観になるか、また、均質の歩みの対象として述べられないかは言われていない。歴史は終末を持っていて、すべてのことはその方向に向って動いているということは Hegel のもとでは公理的である。発展の原則は、したがって始源から目標への道程として理解され、単純に互に先を争って前にあるものでもなく、また後にあつて交わるものでもないと理解される。このようにして精神の真実の本質は行為することであり、活動的になることであるという命題はまた理解されることができ。活動的になるということとは目標に向って、すなわち、歴史における精神の実現に向って活動的になることとして考えられることができる。このようにして、Hegel は、歴史は時間における精神の発展であり、同様に、自然は空間における理念の発展であるという命題をもって最後にまとめることができる。歴史は精神の一步一步の展開と自己実現以外の何物でもない。

S. 464

(c) 締めくくり

HEGEL の詳細な、また、言語的に文句の多い叙述の成果を思考上の鎖にまとめるならば次のことが生じてくる、すなわち、人間の必要、人間の意思を外にあらわすこと及び人間の情熱は歴史の歩みを決定するのであり、また、それとともに、歴史は時間における精神の実現であるがゆえに、精神を決定する。国家は最高の精神の具象化であるので、この必要こそ国家の本質をも決定するのである。国家は「倫理的な全体」を再現するので、必要の総計は同時に倫理をもまた決定する。

その他の HEGEL の意味表明は同じことを目標にしている。すなわち、精神はその性質上自由を利用する。けだし、精神は四方八方に展開するからである。しかし、自由は歴史的に必然の歩みのなかへ埋めこまれている。自由は、それゆえ歴史的に必然なものへの洞察である。

自由の精神は国家のなかにその沈澱を見つけるのであり、また、そのことを通して、自由にもとづいて展開されるもの、すなわち、人間的な活動性は国家の、また、倫理的なものの本質となる。国家に関していえば人間的な活動性は同時に民族の倫理性と法とを決定する。経験は構想であり、また、同時に法である。生起していることの制御は行われない。法は、国家と同様に、生活の必要、情熱と苦悩をとまなうこの生活の写しである。

HEGEL のもとでこの成果のあきらかに目にみえる背理性は、一方においては精神と非物質の同一化のなかにあり、他方においては精神の物質的存在の有意的な行為の流出としての歴史の実現の同一化のなかにある。このようにして、HEGEL は、歴史はまた自然的な事象的な契機を挙示し、そしてこれらは無視されてはならないということをも、はじめに述べていることはもちろんであるが、その場合、彼は、既に最も近い命題のなかで、もっぱら、精神にふり向き、そして、そこにどまるということはあるからである。自然の契機もまたその役割を歴史のなかで演ずる、という命題は、HEGEL の固有の叙述によれば誤りである。その理由は、必要、関心と情熱は、それらは自由にあらわされるということを通して精神にさへなる。それとともに歴史における精神と自然の対立にとつていかなる可能性もはや存在しない。結局、HEGEL は「現象学」において「目的」「物質」として、低い動機から中傷して傷つけるが、しかし、それをその場合「必要」として精神の後光、また、歴史の目標の後光を装備するという矛盾がまたあきら

S. 465

かにされる。

HEGEL の世界精神は何を意味しているのであろうか、一方では冒頭に述べた神的な理性との関係において、他方ではプラトンの理念論との関係において、人々はそのことにつき、たいへん頭をひねってきた。ここで行われるように、「精神現象学」のための序文の、また、「歴史哲学」の導入の内容を短くまとめれば、HEGEL にとって世界精神の概念は本質的に決定論的—現実主義的な生の哲学の補助手段であるということ、すなわち、生起していることは生起しなければならないし、また、それとともにそのうえ正しく生起するというように思われる、この思考的な体系において実現されないものは正しく行為していかないのであり、また、その行為は世界精神、歴史の計画に反しているということに異議が唱えられるにちがいないのみならず、それは民族と国家、倫理と法の外部におかれるということに異議が唱えられるにちがいない。

本文は、普遍的な HEGEL の出発位置につき学説の二つをたよりにして中心と考えられたが、この本文によって発展させられた概観は、HEGEL の法の表象に突き進むために、個々の点の考察を必要とする。さらに、個々の点は HEGEL 及び HEGEL 学派の人の法の理解にとって重要であるので、次の点がつかみだされるべきである。すなわち、HEGEL の反歴史的な歴史理解、歴史理解の現実概念と妥協概念の両面価値、定立、反定立と総合に関する HEGEL の認識理論的な三つ組、それと関連して HEGEL の客観—主観—関係の意味づけ、そこから一方において演繹されて、概念の HEGEL の概念また、結局そこから結果として生じてゆく国家と法、民族と倫理の理解への上昇。

(I) HEGEL 哲学の個々の点

(a) HEGEL の反歴史的な歴史理解

HEGEL の歴史概念とその「反歴史性」の主題設定は哲学的な、また、歴史理論的な問題であるのみならず、直接的な法理論的な問題である。DIEDERICHSEN によれば HEGEL のものでは「権力的な試み」が問題であり、それは「一面では啓蒙時代の理性の信仰を救うことであり、他面では、人間は歴史的な発展に屈服させられているという現象を使いこなすことである。しかし、次のこと

S. 466

が全く重要である。言語、人倫そして法、また、その他の社会現象は測られるものではなくして、これらをその固有性において把握するために、他の範疇、いいかえれば思考形式を求めるということを洞察することである。この苦しい努力から精神科学は自然科学から連れもどされ、「生命の秩序を国家、社会、法、人倫、教育、経済、技術のなかで、また、世界の意味づけを言語、神話、芸術、宗教、哲学と学問のなかで対象として持つ学問としてである」(ROTHACKER)。⁽⁸⁾それゆえ、HEGELの「客観的精神」もまた自然科学的認識から免れている思考形式である。HEGELは歴史のための苦しい努力をもって「世界市民的煽動的な傾向をとまなっている超驗的な自然法」に対して、また、その「平板な—合理主義的な理由づけをとまなっている超驗的な自然法に対して反対するのである」。

HEGELは、⁽⁹⁾一方では、彼が—SAVIGNYと同様に—尊敬を感じていた MONTESQUIEU に従っており、他方ではドイツの疾風怒涛の直感信仰に従っており、この怒涛は、なかんづく HERDER, GOETHE 及び浪漫主義者たちのもとで見られたのであり、しかしまた HOLDERLIN のところでも見られたということとはあきらかである。⁽⁹⁾この考えは、SCHELLING を通して比較と歴史において哲学的に媒介されたのであり、このことは LANDSBERG が示しているところであるが、とりわけ BRIE によって「注意深く正しく確認」される。本来、比較してゆく、また、歴史的な関連における思考は人文主義と宗教改革の時代からその根源を持っているのであり、そこでは、まずはじめに、SOKRATES の哲学の方法以前からギリシャの古典文芸以来、歴史は終末のない流れとして再び発見された。Hugo Grotius は彼の対照において、これは比較的に知られていないのであったが、方法的な点において、一五〇年後彼のと MONTESQUIEU がしたことが同様なこと、すなわち、国民と時代に従って企図された法理解の比較を行ったのであった。MONTESQUIEU のもとではなお、比較してゆく、また、歴史的な理解は、たとえ合理主義的に硬化しているとしても、宗教改革期の対話的な思考にゆるくむすびつけられているのであり、このことは MONTESQUIEU の感激がイギリス社会とその政府のために証明しているところである。

ドイツの疾風怒涛において比較と歴史は非政治的な自然法に対するほんのわずかの抵抗であったのであるが、自然法を宗教改革的な前提から引き離すことはもはや見られなかった。それゆえ SCHELLING と HEGEL にむかって比較と歴史の要請が今なお理解されない短縮においてやって来たにすぎない。基礎になっている政治的な理解、疑問と同調における思考、すなわち、宗教改革の

S. 467

社会的に起草された経済的な、また、政治的な俗人司祭身分がドイツにおいて実現されることができなかったのも、自然法がまた一〇〇年以前その非政治的な、また、前提から自由な隅に押しやったものがたしかに登場した。すなわち、宗教改革の獲得物の非政治的な世俗化である。

このことに、たとえ「精神化された」国家であるとしても、命令してゆく国家を通して社会的な意思形成を Hegel が代理するところとつづくのであり、また、彼が歴史的な発展を目的に向って宗教的・神秘的な経過を通して代理することがとつづくのである。LANDSBERG はこのことを次の語をもって詳しく書いていて、すなわち、「だからこそこの人 (MONTESQUIEU) にとって、ならびに SAVIGNY, SCHELLING 及び HEGL にとって法は特定の国民と特定の時代のすべての性質の特性の全体を通して条件づけられるのであり、したがって特にまたすべての時代のすべての民族のもとは異なる法であり、SAVIGNY にとって憎まれた革命の「ナポレオン時代の恵平等に対立する法である。それには最終的に、また、とりわけ、歴史的な関連への、漸次的な、歴史的な生成と消滅への、法と国家のすべての発展段階を理解するための唯一の充分な手段としての、地上における世界精神の理念の現実化としての歴史への継続的な指示が属するのである」⁽¹⁰⁾」

時間的に最後に名前をあげられた者、Hegel のもとでの世界精神の理念の実現は、しかし、歴史概念の意義におけるいかなる歴史でもなく、この概念につき DIEDERICHSEN は(他のすべての人と同様に) Hegel にとって理性思想とのむすびつきが重要であったと言っている。新しい歴史概念を発展させることは Hegel の決断にゆだねられていたことはもちろんである。彼はこのことをまた非常に意識的に行ったのであり、その神祕的認識の表象にさかのぼって行った。その場合しかし Hegel の業績は理性と歴史の統合であったという命題はもはや維持されない。その理由は、ギリシヤの古典学の、また、宗教改革の歴史概念はまさに神祕的認識の概念ではなくして、特別に仮定してゆく歴史概念であり、それゆえ何等かの理念が実現される歴史概念ではなくして一つの歴史概念であり、その経過理解は人間を通してあやつられない罪—運命—展望によって決定される。Hegel 的な歴史概念は罪から自由であり、またそれゆえ問題に対して開かれているのでもなく、発展に対して開かれているのでもない。ヘーゲル主義は例えば仏教やヒイズ教と同様に非歴史的に考えているのである。Redel は、個々人からこの「歴史」に関与することは取り去られており、また、そのことを通じて「歴史は直線的な自然の過程のなかで解消するのであり、この過程は歴史の主体に彼固有の役割と彼の活

S. 468 動の意義に覆をかぶせるものであり、」このことは、その場合必ず HEGEL のもとで、また、つけ加えられることであるが、それゆえ、彼に、そのかぎりで従っている MARX のもとで「魔物師された進歩」に到ったのであった、⁽¹¹⁾と述べていることは正しい。

このことでさえ中央ヨーロッパの法律家にとってやはり比較的にとんでもよいことであろうし、ヘーゲルの歴史概念から多くの不利益なことが法にとって重要な歴史的な関係を意味づける際生ずることはないであろう。法律家にとりわけ関心を呼びよせる成りゆきにつき、HEGEL は歴史という語を使っているにかかわらず歴史を意味しているのではなくして、歴史のない構成を意味しているということが認識される。LANDESBORG はこのことを次のことばでいいあらわしている。「SCHELLING から自然科学の荒唐が、空想的―構成への復帰がでてくるように、この復帰からその場合観察の固定した土壌の上でやっと再び苦勞して救われたのであり、このことは法の歴史にとって自然法的な抽象化への復帰を描いているのであり、この抽象化は歴史学派の安全な方法に對立して HEGEL の観点にしたがつて驅使されているのであり、その際ヘーゲル学徒として広くより要求の多いいまわしが使用されるのである。そのかぎりにおいてヘーゲル学派は、たとえそれが大いに歴史的なものを賞讃し、また、要求するとしても、全く反歴史的な学派として名づけられることができる。ヘーゲル学派は、経験的な歴史に導く代りに歴史の構成と歴史の概念に、国民的な法の理由づけの代りに国際的な法の比較に導くのである。また、このことは、じつに、まさか大家の変質した、あるいはより遠ざけられた後継者のもとでのみ行われるのではなくして既に大家の歴史の概観自体のもとで、またその最近の、最も信頼した門人のもとで行われている。」⁽¹²⁾

- (1) そのために個々の点において以下の III と von STINTZING-LANDSBERG, III 2, 1910, 587ff. を見よ。
- (2) そのために個々の点において上述の第二四章の「右の」新ヘーゲル学徒のために「そ」ではまたいかなる範囲まで LARENZ の方法学一般が HEGEL に依拠しているかの問いかけのために、さらに以下の III 4。
- (3) HEGEL 45' "Phänomenologie" の主要部分を完結した 65' "Vorrede" を書いた。ERIC VOGELIN, On HEGEL—A Study in Sorcery, in: FRASER-HABRE-MÜLLER (Hrsg.), The Study of Time, Berlin-Heidelberg-New York 1972, 418ff., 431
- (4) Z. B.: LEON ROTH, SPINOZA, London 1929, 219f.; ERIC VOGELIN aao (vorige Ann.), 435.
- (5) Kap. 28 の体系的立脚地のために上述の Kap. 19 I を見よ。Kap. 28 の表題にマルクス主義的法域 "Marxistischer Rechtskreis" がつけ

加えられた。その理由は、次の三つをさすの“Bindestrich-Marxismen” (Früh-Marxismus, Anarcho-Marxismus, Marxismus-Leninismus, Marxismus-Maoismus, Neo-Marxismus und so fort) の共通な点と特筆をあらわす点とが重要であるからである。ZWEIGERT-KÖTZ は社会主義的法域 “sozialistischen Rechtskreis” に属す。その他の人は共產主義的法域 “kommunistischen Rechtskreis” に属す語である。しかしこの法域の共通な分母はマルクス主義であり、したがって「マルクス主義的法域がより適している。社会主義は基本権民主義においてもまた存在し、共產主義も、例えば、キリスト教において、また、仏教においてもまた存在する。

(6) 「精神の現象学」Die “Phänomenologie des Geistes” は一八〇七年に成立し、HEGELS Werken, Berlin 1832-1887 の初版において I. SCHULZE によって編集された一八三三年、第三巻として出版した。HEGEL の思考を性格づけるための引用されたその他の「歴史哲学」die “Philosophie der Geschichte” に関する論文は一八三七年にはじめて “Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte” という題目のもとで E. GANS によって編集された著作 “Werke” の第九巻として出版した。数百ページの本文は三つの脚注を持っている。そのうち二つの脚注は FRIEDRICH VON SCHLEGEL の筆で書かれた同じ名の論文に関係し、この論文は HEGEL においてなかんづゝ第二の脚注において、鋭い批判をもつて片づけられる。今日たいての場合に使用された LASSON und HOFMEISTER (Leipzig, ab 1905) の出版において第二巻と第一巻が問題になっている。

(7) DIEDERICHSEN, Einführung in das wissenschaftliche Denken, 2. Aufl., Düsseldorf 1972, 19f.

(8) LANDSBERG, a.a.O., 345, auch zum folgenden.

(9) 「現象学」“Phänomenologie” のための序論は「直観」“Anschauung” という語を始めて各々のページに、部分的には、重ねて含んでゐる。

(10) LANDSBERG, a.a.O., 345f.

(11) MANFRED RIEDEL, System und Geschichte, Studien zum historischen Standort von HEGELS Philosophie, Frankfurt/M. 1973, 42 und 43.

(12) LANDSBERG, a.a.O., 353. 「歴史学派の確実な方法」のために上記の代表的立場からは留保がなされなければならなかったであろう。vgl. Kap. 3 und Kap. 23 V.